

【実践事例（Ⅰ）】

（石巻市立河北中学校）

地域住民と校区の災害特性を共有

学校の状況

- 校区は、東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた地区である。
- 令和元年東日本台風においても、校区の多くの地域で浸水や土砂災害が発生し甚大な被害があった。
- 震災後、学校が主体となった中学校区地域防災連絡会を立ち上げ、地域と協力した学校防災に取り組んでいる。

取組方法

「河北中学校区地域防災連絡会」について

目的 河北中学校区の災害対策について、保護者及び地域住民等と連携して推進するとともに、地域ぐるみの学校防災を含む学校安全の充実に図ること

会員 校区内の行政区長、各学校の父母教師会長、市支所防災担当部局、警察署担当課、消防署担当課、各小学校代表等

主な取組内容 ・年3回開催
・災害時の対応の共有と協議
(地域における児童生徒の安全確保、市総合防災訓練への参加体制、避難所開設・運営等)

○地域防災連絡会における令和元年東日本台風における校区の被害状況等の共有

市の浸水ハザードマップを拡大したものを活用して、地域防災連絡会の参加者で、台風での浸水や土砂災害による被害を受けた箇所をマップに落とし込んだ。

児童生徒の通学路でどのような被害があったか、留意すべき箇所はどこかを具体的に把握でき、学校のマニュアル見直し生かすことができた。



○生徒目線での令和元年東日本台風における校区の被害状況等の共有

- ①地域住民からの台風の被害状況を加えたマップを活用して、生徒目線での台風の被害を受けた箇所や、その他の危険箇所をマップに落とし込み、登下校時等における災害が発生した場合の安全確保の方法を共有した。
- ②翌年度の新入学生の一入入学の際に、在校生からの台風の被害状況を加えたマップを活用し、さらに新入学生の目線での危険箇所を落とし込み、登下校時等における災害が発生した場合の安全確保の方法を共有した。

地域住民との災害特性の共有を通して

地域をよく知る住民から、地域の災害特性や危険箇所を聞くことは、学校の防災対策や児童生徒の登下校時の安全確保を図る上で、大変有効なものとなった。

さらに、把握した災害特性等を、教職員だけでなく、生徒とも共有できたことは、生徒自身にとっても災害発生時の安全確保の方法を学ぶよい機会につながっている。

今後も、地域住民と災害時の対応について、軌を一に取り組めるよう、このような機会を継続していきたいと考えている。